

アイヌ生活文化再現マニュアル

「祖先の時代の
チセづくり」
建てる



財団法人 アイヌ文化振興・研究推進機構

アイヌ生活文化再現マニュアル

建てる

—祖先の時代のチセづくり—

発刊にあたって

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構は、平成9年7月の設立以来、アイヌ文化の振興、アイヌの伝統やアイヌ文化に関する知識の普及啓発、アイヌ文化等に関する研究の推進や助成などの各種事業を実施しております。

そうした事業の一環である「アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業」は、アイヌの伝統文化を、映像や音声、文字などによって記録し、アイヌの人々をはじめとして、広く一般の人々や研究者の利用に供することにより、アイヌ文化の伝承・保存を図ることを目的としています。

今回は白老地方のアイヌの住居「チセ」をマニュアル化しました。

今後より多くの人々の利用に供され、アイヌ文化の振興が推進されるとともに、我が国の多様な文化の一層の発展が図られれば幸いです。

目 次

はじめに

I 準 備

用 材……………2

加 工……………2

II 建 築

屋根を組む (小屋組み)

1. 桁 (ソペシニ)・梁 (ソエカリニ) ……3

2. 三脚 (ケトゥンニ)・棟木 (キタイオマニ) ……5

3. 隅垂木 (シッケウリカニ)……………8

4. 水平材 (サキリオマニ)……………9

5. 垂木 (リカニ)……………10

6. 棟木 (キタイラリニ)……………12

7. 煙窓 (エトウポク)……………12

8. 茅押さえ材 (サクマ)……………13

屋根を葺く (1段目)

1. 屋根すだれ (アクッポクンベ)……………16

2. 屋根葺き (1段目)……………16

3. 庇 (エトウ、プヤラシクラブ)……………19

屋根を持ち上げる (チセプニ)

1. 隅柱 (シッケウイクシペ)……………21

2. 屋根を持ち上げる (チセプニ)……………22

外 装

1. 間柱 (イクシペ)……………25

2. 茅押さえ材 (サクマ)……………26

3. 玄関兼物置 (セム、モセム)……………27

屋根を葺く (全面)……………29

壁を葺く……………36

入口 (アパ)・窓 (プヤラ)……………39

内 装

1. 炉棚 (トゥナ)……………41

2. 炉 (アペオイ)・炉縁 (イヌンペ)……………43

3. 内壁……………45

4. ごぎ (チタラペ、キナ)……………46

5. 床 (ソ)……………46

6. 窓すだれ……………47

| | |
|--------------------------|----|
| Ⅲ 附属建物 | |
| 1. 仔熊飼養檻（ヘペレセツ） | 48 |
| 2. 食糧庫（プ） | 49 |
| 3. 便所（アシシル、メノコル）・物干し（クマ） | 51 |
| Ⅳ チセ建築に伴う儀礼 | 53 |
| おわりに | 54 |
| 部材一覧 | 55 |
| 内装材、道具一覧 | 56 |
| 平面図・立面図 | 57 |
| 参考文献 | 58 |
| 復元したチセが見られる施設 | 59 |

— 例 言 —

1. 本マニュアルは、平成10年11月4日から同年11月25日にかけて、財団法人アイヌ民族博物館においてチセを建築したときの記録をもとにしています。

本文にもあるように、チセは、100年以上前の古い時代の造りを基本にして建ててみましたが、一部、新しい試みも取り入れています。

2. 本マニュアルでは、材料名、チセの部位名称などについては、日本語で表記し、一部、（ ）内にカタカナでアイヌ語名を入れています。

なお、「茅押さえ材」などのように、日本語名で多用すると、読みづらくなってしまうものについては、初出以降は、アイヌ語名を用いています。

3. 本マニュアルは、執筆・編集を財団法人アイヌ民族博物館が行い、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構が監修しました。

はじめに

アイヌ語で家をチセといいます。チセは、壁や屋根材として用いた材料などによって、いくつかの地域性が見られます。たとえば、茅を用いたチセは、胆振地方や日高地方をはじめとして、北海道内で一番多く見られます。また、笹を用いたチセは、主に上川地方に多く見られます。さらに、白樺など、樹皮を用いたチセは、北海道東部、根室地方を中心に見られます。これらのチセは、いずれもその地域において、最も手に入りやすい材料が使われています。

チセはまた、工法、構造、各部位の呼称などにも地域性が見られます。

さらに、茅葺きのチセは、本州の茅葺きの家と比べて、いくつかの特徴があります。まず、北海道内で共通した大きな特徴として、①屋根が段葺きであること、次に、地域性を持ちますが、②屋根を地上で組み立て、柱に乗せる、③屋根にケトウンニと呼ばれる三脚構造を持つ、④柱が内側に傾斜して、「外ふんばり」になっていることなどが挙げられます。

このように、地域性ととともに、いくつかの特色を持ったチセですが、さらに、チセを建てるに当たり、信仰と深く関わって、大きな「決まり」がありました。

チセの多くが長方形をしておりますが、必ず長軸方向に上手と下手を持ち、上手に神窓がつくられ、下手に入口がつくられます。上手といわれる方向（方角）には地域性があり、イ、東、ロ、川上、ハ、高い山、ニ、海、などがあります。また、上手の外には、幣柵（祭壇）や仔熊飼養檻など、神々と関わりの深い施設がつくられ、下手の外には、人間が使う便所などがつくられました。

明治以降、生活文化の大きな変化によって、チセは徐々に姿を消し、現在、生活の場としてのチセは一軒もありません。しかし、その建築技術は現代に伝えられ、北海道各地で復元されたチセを見ることができます。

今回、マニュアル事業で建てたチセ（以下、「ポンチセ」と呼びます）は、屋根や壁材に茅を用いた、母屋が東－西（桁行）：3間（5.4m）、南－北（梁間）：2間（3.6m）、モセム：1間（1.8m）という大きさのもので、古い時代の造りを基本にして、釘などを使わずに建ててみましたが、一部、新しい試みも取り入れています。

※ここでいう「茅」は、「よし」や「あし」のことです。



茅葺きのチセ



茅葺きのチセ（旭川市博物館蔵）

I 準備

用材

チセに用いる材料は、その地域で入手しやすいものを使います。柱や桁、梁、垂木、茅押さえなどは、腐れにくく、長もちする木で、素性のいい真っ直ぐなものを選びます。たとえば、柱にはくり、みずなら、どしなら、やちだもなどが、桁、梁、垂木にははんのき、結束材にはしな（内皮）、ぶどうづる、こくわづるなどが使われます。



切り出した用材

加工

作業に入る前に、用いる材料を加工します。柱や桁、梁、垂木、茅押さえなどに用いる木はすべて皮をむきます。皮がついていると、虫害や腐れの原因ともなり、チセが長持ちしません。また、柱に用いる木は、地中に埋まる部分の表面を火で焼いておきます。これも、虫害や腐れを防ぐためです。

屋根や壁を葺く茅は、根元を揃え、各用途に応じた太さに束ねておきます。その際、束ね方がゆるいと腐れや雨漏りの原因となりますので、しっかりと縛ります。



皮をむいた用材



茅を束ねる



柱材で地中に埋まる部分を焼く

II 建築

屋根を組む（小屋組み）

屋根の組み方は、地組みといって、地上で組み立てる方法と、柱を立て、その上で組み立てる方法とありますが、ここでは、地組みを用います。



柱を立て、その上で組み立てる



地組み

1. 桁（ソペシニ）・梁（ソエカリニ）

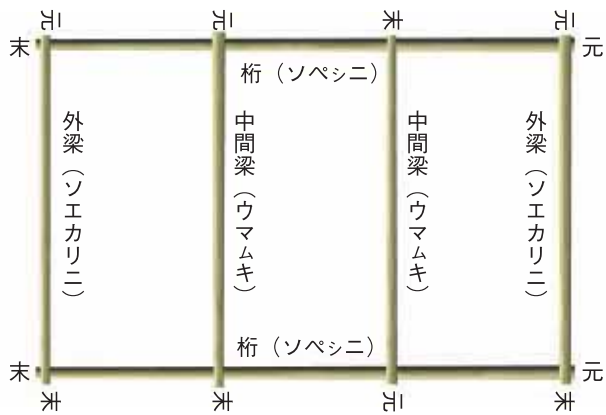
まず、家を建てようとするところに、東—西の方向に桁（ソペシニ）を2本置きます。このとき、2本とも木の元口（根元のほう）は東に、また、木の反りの凸面を上にします。

次に、その桁の上に、南—北の方向に外梁（ソエカリニ）を2本置きます。このとき、東側の梁は、木の元口を北側に、西側の梁は南側にします。

さらに、2本の外梁の間に中間梁（ウナムキ）を2本置きます。



桁と梁を置く



桁・梁の元口と末口

4本の桁・外梁、2本の中間梁の位置が決まると、それぞれ桁・梁が交差する箇所で、梁に桁を受ける「受け」をつくります。「受け」は、桁の丸みに合わせて、半円形にします。



桁と梁の交差

桁と外梁を組み合わせたら、交差部を太めのしな縄を使って結束します。



「受け」をつくる



しな縄で結束する

2. 三脚（ケトゥンニ）・棟木（キタイオマニ）

桁や梁が出来上がると、今度は、その上に組む三脚（ケトゥンニ）を2組つくります。

この三脚は、アイヌのチセに多く見られる、独特の構造です。



三脚をつくる3本の木としな縄の輪

まず、用いる木を加工します。3本の木の元口の端を扁平に削って、先をとがらせ、扁平な部分の中心に穴を開けます。これは、桁・梁に当たる部分で、穴は桁・梁と結束させるしな縄を通すものです。また、しな縄の輪が当たる部分に「受け」をつくりま



扁平な部分に穴を開ける



元口の端を扁平に削り、先をとがらす

次に、加工を終えた3本の木を水平に並べ、しな縄を幾重にも束ねた輪を木の末口のほうの端から40～50cmくらいのところにつけ、真ん中の木をほぼ一回転させます。

※3本の木のうち、真ん中の1本を逆方向に並べ、その木を下に下げるといった方法もあります。



真ん中の1本を一回転させる

これで三脚は出来上がりですが、このとき、輪にゆるみがないか、輪の大きさに注意が必要です。



三脚の頂部

次に、完成した三脚2組を、東辺と西辺の桁・梁の上に乗せ、さらに、三脚の上に棟木（キタイオマニ）を乗せて、高さや3本の足の立ち具合などをみます。

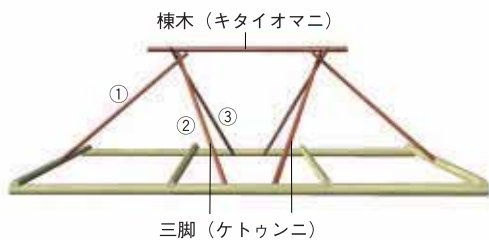
この三脚によって、屋根の高さや傾斜が決まりますので、三脚が長すぎたり、短すぎたりしないように、柱の長さとのバランスを見ることが大切です。傾斜が緩やかですと、屋根に雨や雪が残り、雨漏りの原因となります。

ちなみに、適当な傾斜の角度は45度くらいといわれています。



完成した三脚を桁・梁に乗せてみる

三脚構造と屋根の角度

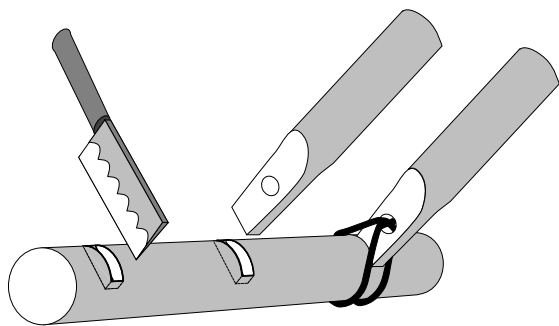


四方の屋根面（垂木面）を45度傾斜させる場合の三脚の組み方の一例

- ①長さ237cm 東へ41度
- ②長さ263cm 北へ41度・西へ23度
- ③長さ267cm 南へ41度・西へ25度

- ・屋根面（垂木面）は三脚より急勾配になり、茅で葺くとさらに急になります。
- ・三脚という3本の棒の長さは同じと考えがちですが、同じ長さの3本の棒を使って四方の屋根面の角度が同じになるように三脚を組むと、②③が東西方向へ傾かず、真っ直ぐになってしまいます。
- ・また、三脚の交差は厳密には一点ではなく、三脚の足を刺す桁と梁の高さも違いますから、棒を切り揃える前に、実際に桁・梁の上に置いて試してみましょう。

三脚の形が決まりましたら、桁・梁の三脚が当たる部分の内側に「受け」をつくり、各三脚の足を入れ、しな縄で結束します。



しな縄で結束する



棟木を乗せ、バランスを見る



桁・梁に「受け」をつくる



しな縄で結束する

3. 隅垂木（シッケウリカニ）

棟木を渡した状態で、隅垂木（シッケウリカニ）を置きます。すなわち、桁と梁が交差している4隅で、それぞれ最寄りの三脚と棟木の交差部に向かって隅垂木を置きます。

なお、隅垂木は三脚同様、それぞれ元口の端を扁平に削って、先をとがらせ、扁平な部分の中心にしな縄が通る穴を開けます。



隅垂木を置く

隅垂木を置いて、バランスを見たあと、梁に「受け」をつくり、結束します。これも三脚のときと同様に、梁の「受け」に隅垂木を入れ、しな縄で縛ります。なお、この「受け」は、三脚を結束したところより外側につくります。



しな縄で結束する

次に、先に仮結束した桁と外梁の交差部を、さらにその上からぶどうづるで縛ります。ぶどうづるは皮を剥き、なかから水分が出てくるくらいまで火で焼いて、充分軟らかくしてから使います。



ぶどうづるを焼く



ぶどうづるで縛る

4. 水平材（サキリオマニ）

隅垂木の結束が終わりましたら、屋根面の中間部に水平材（サキリオマニ）をつけます。

水平材は、隅垂木の内側、三脚の外側を通し、それぞれ交差するところをしな縄で結束します。



水平材をつける

水平材をつけ終わると、隅垂木の上のほうをしな縄で結束します。



隅垂木の結束

5. 垂木（リカニ）

次に、垂木（リカニ）をつけます。

まず、垂木の元口の端は、三脚や隅垂木と同様に、扁平に削って、先をとがらせ、扁平な部分の中心にしな縄が通る穴を開けます。また、桁・梁の垂木が当たるところに「受け」をつくります。

次に、垂木の元口を下にして、屋根の中央に寄せるように、左右から傾斜をつけて置き、全体のバランスを見て、上のほうを切り揃えます。

垂木の上面は、隅垂木の上面と同じ高さになるようにします。

その際、東面と西面は、煙窓下の水平材（エトウポクンニ）をつけてから置きます。

東と西の面の垂木は、上部に煙窓（エトウポク）をつくるため、上のほうは煙窓下の水平材より少し上のところで切り揃えます。

ちなみに、ポンチセは、東と西の面に各6本、南と北の面に各9本の垂木をつけています。

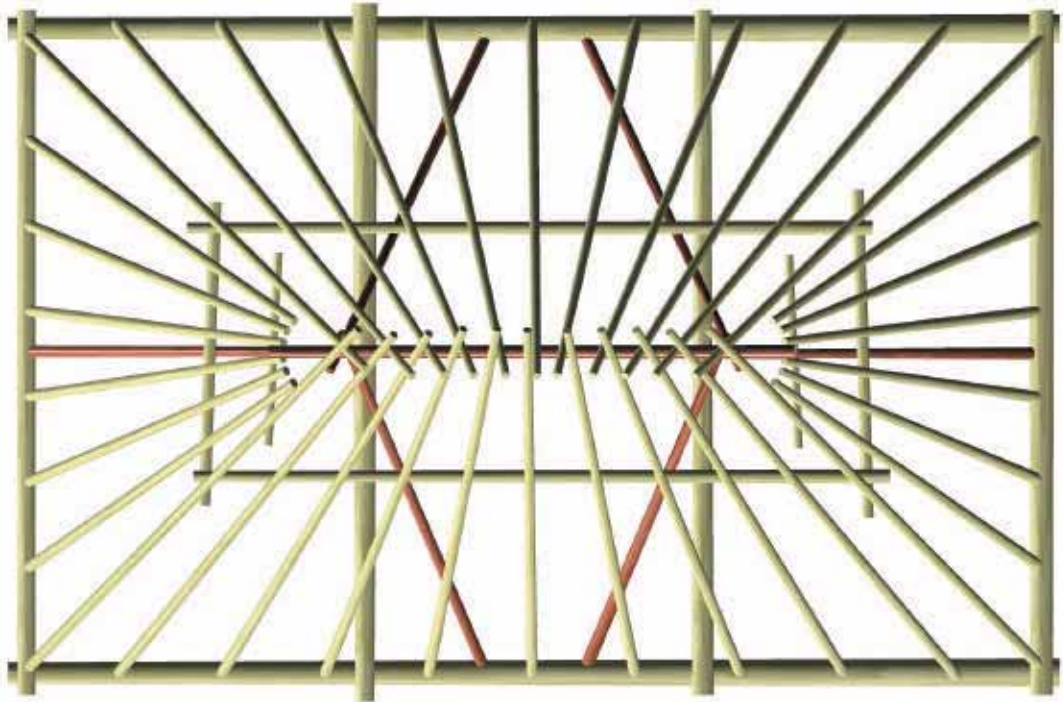


垂木を置く



西面の垂木

上面図



再度、垂木の並びのバランス等を確認したら、しな縄で桁・梁に結束し、さらに、頂上部の交差したところも結束します。



垂木の結束

※軒を長く出す場合は、垂木を桁・梁の上に乗せます。ただし、地組みでは、軒が地につかえてしまいますので、あらかじめ、桁・梁の下に土台を置くなどして、高くしておきます。

6. 棟木（キタイラリニ）

垂木をつけ終わると、先に渡した棟木の上にもう1本、棟木（キタイラリニ）を渡します。この棟木は、南北の垂木の交差の上に渡しますが、下の棟木より長くなります。

2本の棟木は、両三脚の外側で、それぞれ結束します。



棟木を渡す

7. 煙窓（エトウポク）

次に、東面と西面に煙窓（エトウポク）をつくります。

先につけた煙窓下の水平材と隅垂木の結束したところから、それぞれ棟木（キタイラリニ）の端に向かって木を渡し、棟木の上で交差させ、その交差部と棟木を結束します。同様に、隅垂木と接しているところも結束します。



煙窓をつくる



煙窓の骨組み

8. 茅押さえ材（サクマ）

次に、茅押さえ材（サクマ）をつけます。このサクマ（アウンサクマ）は茅の下になり、茅の上にあるサクマ（ソユンサクマ）との結束によって、茅を挟み、固定させる役目を持っています。

サクマ材は、素性のいい、真っ直ぐな木を選びます。太さは、つける箇所によって異なりますが、元口の径がだいたい2～4cmくらいのものが適当です。

つける順序は、まず、屋根の下、桁・梁から少し上のところで、1段目の茅を押さえるサクマからつけます。

なお、この一番下のサクマは出来るだけ下のほうにつけます。そうすることにより、軒の茅を長く出すことができます。

※サクマは各段とも東西南北同じ高さで水平につけます。高さが狂いますと、茅の段葺きが歪んでしまいます。

一番最初のサクマは、東面の北側につけ、順次、南面、西面、北面とつけていき、途中で接する隅垂木、垂木とはすべて結束します。



サクマをつける



垂木と結束

また、サッカとサッカは途中で結束しながら、連続性を持たせます。



1 段目のサッカ

同じ要領で、2 段目、3 段目とつけていきます。



サッカをジョイントする



上に向かってサッカをつけていく

ポンチセは、東面と西面に各 4 段、南面と北面に各 5 段つけています。

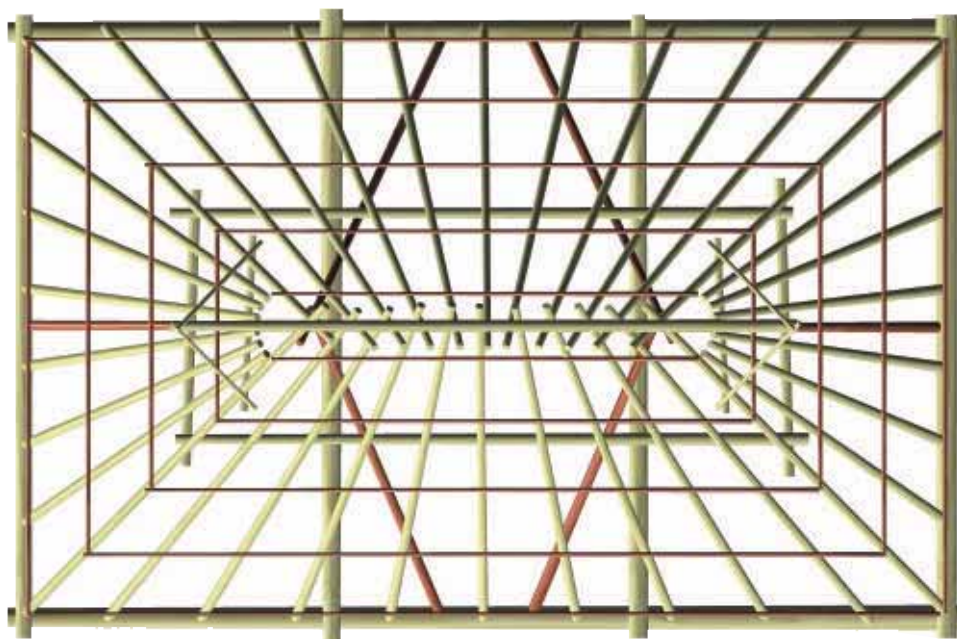


南面

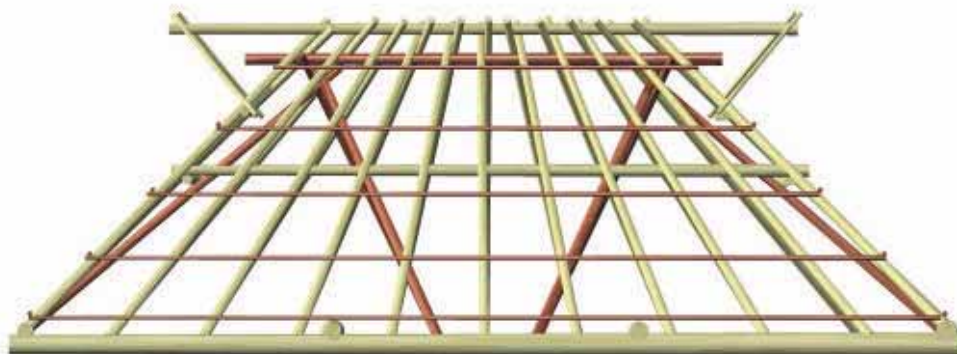


西面

サツマをつけ終わると、屋根組みは完成です。



上面図



正面図

屋根を葺く（1段目）

1. 屋根すだれ（アクッポクンペ）

次に、屋根全体に屋根すだれ（アクッポクンペ）をつけます。屋根すだれは、屋根や壁を葺く茅よりかたい鬼茅をぶどうづるの皮の撚紐で編んだもので、屋根裏から茅の穂が垂れるのを防ぐとともに、防火の役目をします。



屋根すだれ、隅の部分



屋根すだれをつける

※ここまでできますと、柱を立て、屋根を上げることもできます。どの段階で屋根を上げるかは、屋根の重さと、持ち上げる人数によります。屋根葺きなど、出来るだけ地上で作業をしたほうが安全で、万事がスムーズですから、以後の作業は、屋根の重さ、関わる人員数などに注意を払い、進めていきます。

ポンチセは、南面と北面の1段目の茅を葺き、東面の神窓の上の庇をつくってから、屋根を上げました。

2. 屋根葺き（1段目）

次に、屋根葺きです。屋根葺きは、下のほう（1段目）から上のほうへと、順次、葺いていきます。1段目は、雨などで一番痛みやすいところですので、茅束は太めのものを使いますが、上にいくにしたがって、次第に小束を使います。同じ太さの茅束を使っていけますと、厚みが増してきて、茅が立ってしまうのを防ぐためです。

茅束は、少しの隙間も出ないように、びっしりと詰め込むように端から順に置いていきますが、中央には短い茅を、両端には長い茅を使い、垂木を置いたときと同様に、開いた扇を逆さにしたように置きます。



茅を置く

この1段目の茅は、軒となります。短いと、壁の下部分に雨垂れが落ちたりして、壁を痛めますので、長く出すようにします。

最初に、屋根面に茅をしな紐で仮に固定させます。茅の根元は下向きです。

※ポンチセでは、1段目の茅を並べた際に、支えとしてしな紐を使って仮に固定しましたが、地方によっては、板を置いたりして、茅を支えます。

この作業には、先端をとがらせ、その少し手前を扁平にして中心に穴をあけた針（ケム）を使います。



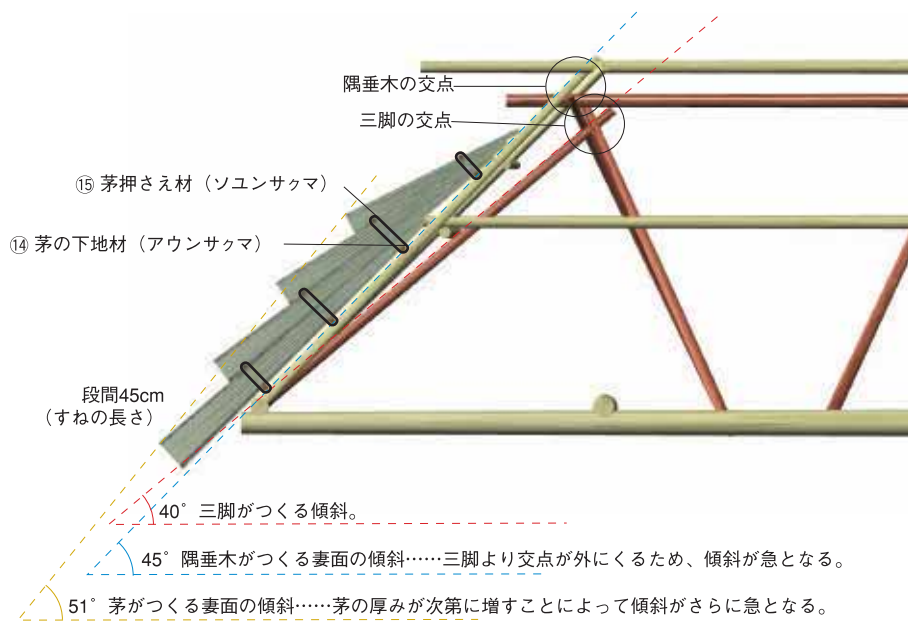
針（ケム）

作業は、各面とも端から行います。2人あるいは3人が一組となり、そのうちの1人は屋根組のなかに入り、針を使って、しな紐を屋根組の内外に出し入れし、他の人は、屋根組の外側で、そのしな紐を使って、茅を固定させていきます。

針は、茅の目にそって、面に直角に刺していきます。



茅を固定する



茅を固定する



針を刺す



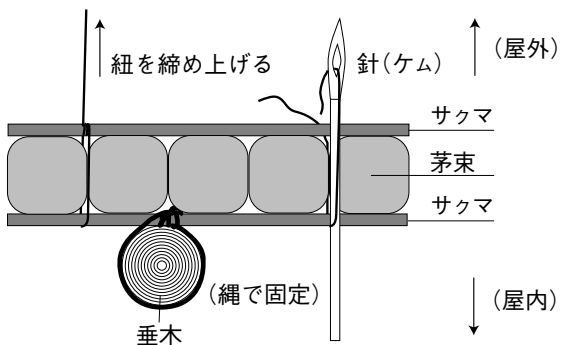
茅をサッカで押さえる

次に、固定した茅をサッカ (ソユンサッカ) で押さえていきます。この作業も2人あるいは3人が一組となり、そのうちの1人は屋根組のなかに入り、針を使って、しな紐を屋根組の内外に出し入れし、他の人は、屋根組の外側で、そのしな紐を使って、茅をサッカで押さえていきます。

茅は、先につけたサクマと今回つけたサクマに挟まれ、しな紐で結束されます。

なお、4隅のサクマ（ソユンサクマ）は、火で焼いて、「く」の字型に曲げたものを使います。

針刺し



サクマのジョイント部分

3. 庇（エトゥ、プヤラシクラブ）

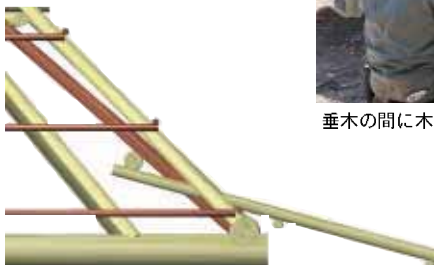
茅の結束と並行して、東面の神窓の上にくる庇（エトゥ、プヤラシクラブ）をつくります。

まず、木を4本、東面の中心部の垂木4本の間それぞれ入れます。



垂木の間に入木

庇の骨組み



その4本の両端にそれぞれ横に木を1本置いて、結束します。この際、屋根組の内側は、4本の木の上に、外側は4本の木の下に置くようにします。また、内側に置いた木は庇を支える役目をしますので、やや太めのものを使います。



両端を横木と結束する

次に、屋根すだれを置きます。



屋根内側の庇



東面に屋根すだれを置く

庇に茅を葺きます。屋根の場合と同様に、垂木にサクマをつけて茅を置き、その上にサクマを置いて、しな紐で結束します。



庇に茅を葺く

ここまでの作業を終えると、次は、屋根を持ち上げ、柱に乗せます。

屋根を持ち上げる (チセプニ)

1. 隅柱 (シッケウイクシペ)

最初に、4隅の柱 (シッケウイクシペ) を立てます。隅柱として用いる木は、先がY字型一股木になったものを選びます。

土に埋まる部分は、腐れたり、虫害を防ぐため、表面を火で焼きます。



土に埋まる部分を焼く

Y字型になった部分はさらに、桁がうまく納まるよう、また、長すぎて軒の茅を持ち上げたりしないように加工します。

※本来、柱の根元はとがらせ、穴に突き立てるのですが、ポンチセの場合、敷地が湿地で軟弱なため、とがらせてはいません。



Y字型になった部分を加工する

次に、隅柱を立てる穴を掘ります。穴の位置は、桁と梁が交差したところの外側になります。



柱穴の位置

掘り具は、ホタテやホッキなどといった、少し大きめの貝殻を使います。

穴の大きさは、隅柱がぐらつかないよう、隅柱の太さとほぼ同じぐらいにします。

次に、隅柱を立てます。重量のある屋根が乗りますので、しっかりと立てます。



ホッキ貝を使って穴を掘る

隅柱を立てましたら、次は、屋根を持ち上げ、隅柱に乗せます。屋根を持ち上げることを「チセプニ」といいますが、チセプニは、チセづくりの最大の山場です。

2. 屋根を持ち上げる (チセプニ)

チセプニは人手が必要です。かつては、村人総出で行われたといわれます。

チセプニはいろいろな方法がありますが、少人数で行う場合、あるいは屋根が非常に重たく、一気に持ち上げることが出来ないときなどは、屋根の片側を少し持ち上げるたびに臼などを土台として積み重ねていく、それを交互に行って行って、隅柱に乗せるという方法がとられます。ポンチセは人出が20人ほどでしたので、この方法を試みました。

まず、片側を上げ、土台を置きます。次に、反対側を上げ、同様に土台を置きます。これを交互に繰り返して、徐々に土台を高くしていきます。



反対側を上げる



片側を上げ、土台を置く



交互に繰り返す

屋根が隅柱の先の高さまでできましたら、屋根を乗せます。



屋根を隅柱に乗せる



南面と北面を交互に上げていく方法

※チセプニの別な方法を紹介します。南か北のどちらか一方は、隅柱、間柱を立て、しっかりと固めておきます。反対側も隅柱、間柱を立てますが、固めず、立てたままにしておきます。

屋根はまず、柱を固めた側に乗せ、次に反対側に乗せます。この方法のほうが、安全性が高く、確実です。

隅柱と桁の接合部は、結束せずに、そのまま置いた状態にしておきます。



隅柱と桁の接合部

屋根を乗せた隅柱は、内側に傾斜した「外ふんばり」の形になります。

ポンチセは、約3度の傾斜を持たせていますが、かつてはもっと大きく傾いていたようです。



隅柱の傾斜

外 装

1. 間柱 (イクシペ)

チセプニが終わると、次は、隅柱の間に間柱(イクシペ)を立てます。

間柱に使う木を隅柱と同様に、根元を焼いたり、Y字型の「受け」をつくるなど、加工します。

次に、隅柱と隅柱との間に一間間隔で立てていきます。

この間柱の位置で、窓や戸口の場所が決まります。

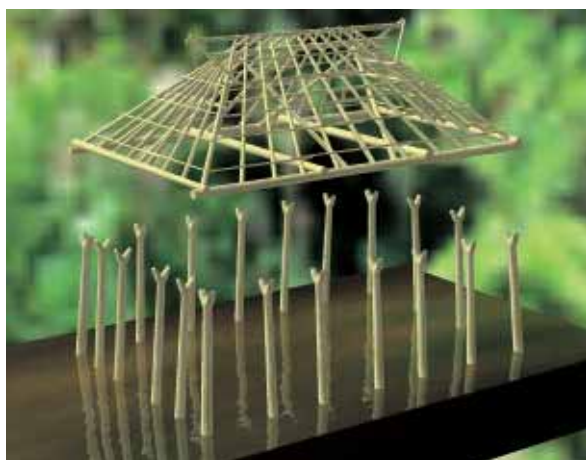


間柱を立てる

間柱と桁は結束せず、置いたままです。



間柱と桁の接合部



間柱を立てた 全景



※間柱は、ポンチセのように、屋根を持ち上げた後に立てる方法と、持ち上げる前にすべての間柱を立ててしまう方法があります。後者の場合、縄を渡すなどして、あらかじめ間柱の高さをそろえておく必要がありますが、多少の誤差は、屋根を乗せれば、間柱が沈んで落ち着きます。

2. 茅押さえ材（サクマ）

次に、すべての壁面にサクマをつけます。

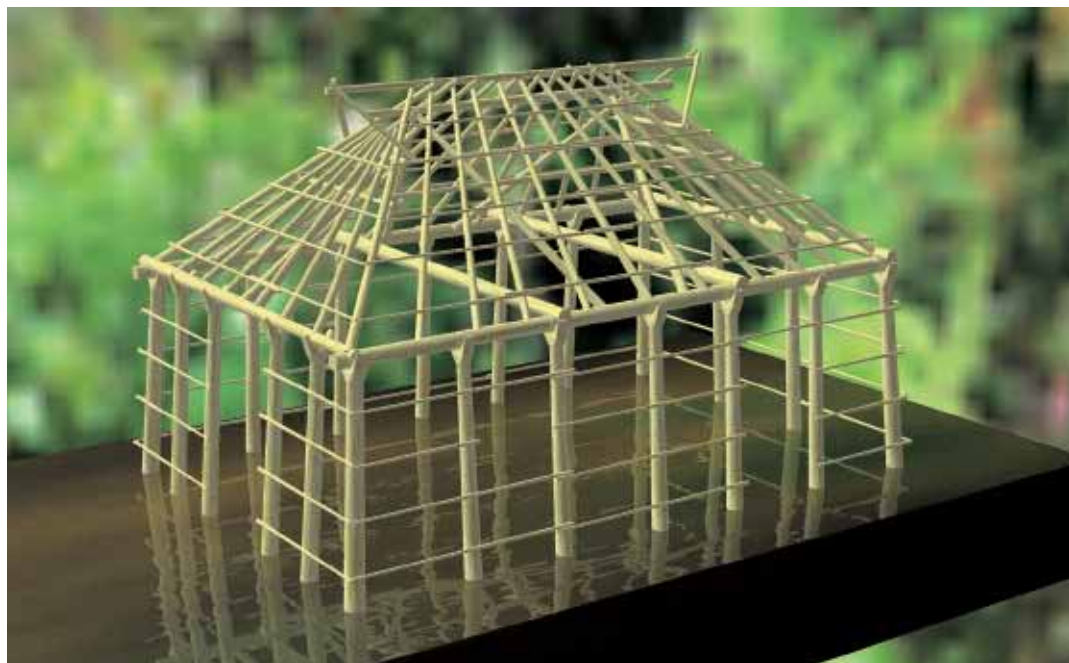
屋根組みでサクマをつけたと同様に、東面の向かって右側から、下のほう—1段目からつけていきます。

窓や入口に当たる部分のサクマは切り落とします。

これで母屋の骨組みは完成です。



サクマをつけた全景



サクマをつけた全景

3. 玄関兼物置（セム、モセム）

次に、玄関兼物置（セム、モセム）をつくります。セムは、チセには付き物というわけではなく、また、形も一様ではありません。白老地方では、棟のある本格的なものをセム、片流れのものをモセム（小さいセムの意）と呼んで、区別していました。

最初に、隅柱を2本立てます。仕様は、母屋のものと同じです。母屋からの長さに決まりはありません。



隅柱を立てる

次に、その2本の隅柱に梁を1本置きます。梁は、両端をそれぞれ柱の位置より20~30cmほど長く出します。軒をつくるためです。



梁を置く

垂木を5本つけます。元口は下になります。



垂木をつける

梁には、やはり母屋と同様に、「受け」をつくります。しな縄で結束します。

※ポンチセは「受け」をつくって結束しましたが、垂木は梁の上に乗せ、下のほうを梁から出すようにしますと、軒を長くすることが出来ます。



梁に結束する

母屋に入った垂木は、横木を1本渡して、それに結束するとともに、交差する母屋の垂木とも結束します。



母屋の内側

垂木をつけ終わりましたら、先の2本の隅柱の間、母屋との間にそれぞれ1本ずつ間柱を立てていきます。南面は入口をつくるので、間柱は西寄りに立ってます。

サクマは母屋の屋根と同様につけますが、垂木と同様に、両端を長く出します。

※ポンチセのような片流れの屋根は、南北の端のサクマを長く出すことにより、軒をつくります。



モセムの骨組み



モセムの骨組み

骨組みが終わりましたら、屋根を葺きます。これも母屋と同様に葺きます。

このモセムの屋根葺きと並行して、母屋の屋根を葺き始めます。



モセムの骨組み（西側）



屋根を葺く

屋根を葺く（全面）

母屋の屋根を葺きます。

屋根葺きは、地方によっては、面ごとに葺きます。たとえば、東の面を下から上まで全部葺き、終われば西の面、次は南の面というふうに葺く場合もあるのですが、白老地方では、一段ごとに、東西南北を一周して葺いていきます。ですから、モセムの屋根や神窓の上の煙窓などといった部分は、先に葺いておく必要があります。

今度は、屋根を仕上げます。高い場所での作業となりますので、足場をつくります。

最初に、先に葺いた1段目の4隅一隅垂木の上に隅茅を置きます。隅茅は、屋根面を葺くときに使われる束より太めのものを使います。

しな紐を使い、隅茅の下の1段目の茅を押さえているサクマに結束しますが、ここでは針は使いません。針をさしたところが雨漏りの原因となるからです。

屋根の隅は傷みや雨漏りのしやすい箇所ですから、隅茅はその補強にもなりますし、装飾的な意味合いもあると考えられます。

日高地方では、屋根葺きの最初につけますが、白老地方では、それぞれの段の最後につけます。



足場をつくる



隅茅をつける



1段目の隅茅

並行した作業で、モセムの屋根は3段目まで葺かれています。



3段目まで葺いたモセムの屋根

2段目からの作業は、1段目のときと同じです。ここで、復習を兼ねて、2段目の作業を見てみましょう。

まず、棟木などから四方に、茅束を並べるための足場丸太を吊るします。



足場丸太を吊るす

足場丸太の上に隙間なくぎっしりと茅束を並べます。茅の根元は下です。垂木の並びと同じく、開いた扇を逆さにしたように並べますが、1段目のサクマが隠れるようにします。



足場丸太の上に茅束を並べる

茅束の上にサクマを置き、上下のサクマをしな紐で縛って、紐を引っ張り、強く締めます。この際、上下のサクマが最短距離になるようにしめないと、あとでゆるんできます。また、同じ理由で、面に対して直角に紐を引っ張ります。



紐を引っ張り、強く締める



2段目の茅（南面）



3段目の茅

3段目と4段目の茅です。

※ポンチセは、1本の足場丸太を1段葺き上がるごとに上のほうに移動させていますが、1段ごとに足場丸太をつけ、そのまま各段につけておく方法があります。この方法ですと、安全性が高く、また、最後の仕上にも使えて便利です。



4段目の茅

5 段目です。ここが最上段になります。

南面と北面は 5 段葺きでしたが、東面と西面は煙窓があるため 4 段になります。



5 段目の茅

5 段目には、「目隠し茅」と呼ばれている茅の小束をつけます。

5 段目は最上段で、サクマの縛り目を隠す次の段がありませんので、この目隠し茅でサクマの縛り目を隠し、雨漏りを防ぎます。また、「棟飾り」として、装飾的な意味合いも持っています。

サクマの縛り目の上に茅の小束を置き、隅茅を結束したときと同様に、下のサクマに紐を通して、結束します。



目隠し茅（西面）

隅茅は、各段ごとに 4 隅に 1 個ずつつけていきますが、5 段目の隅茅に合わせて、外側にもう一つ、やや細めの茅束をつけます。これは、煙窓の枠の役目をします。



5 段目の隅茅

南面と西面の5段目の茅の先は、1束ごとに互い違いにして対面に倒し、交差したところを踏み固め、サクマで押さええます。サクマは、茅を挟んで、棟木と結束します。ここも雨漏りの原因となるところですので、しっかりと締めておきます。



茅を交差させる

併せて、煙窓の上に枕茅をつけます。ちょうど煙窓の底のような感じになります。

茅束は、太めにし、両端を切り揃えます。



枕茅をつける

次に、棟茅を仕上げます。

南面と北面の5段目の上方、各東西の隅茅の間に、垂木と同じくらいの木を置き、サクマと結束しておきます。

次に、頂上部のサクマで押さえたところに、東西に平行して、茅を置きます。



茅を置く

茅は、それぞれ根元を外に向け、東西の端は煙窓の上の枕茅より前に出します。中心部には、両端を切った茅を置きます。全体に厚く置き、丸みを持たせます。



厚く丸みを持たせる

形を整えて、先に棟と平行してつけた木を使い、結束します。ここも雨漏りの原因となるところですので、強く縛ります。



結束する

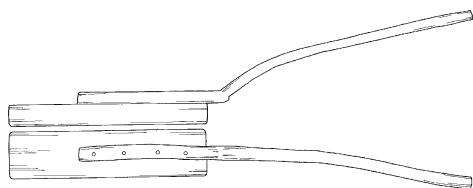
これで完成です。



完成した棟茅

棟茅を完成させると、屋根の仕上です。仕上は、葺くときとは逆に、上のほうから行います。

足場丸太を外し、「叩き板」あるいは「茅叩き」といわれるオール状の道具を使って、茅の下端を叩き、段を揃えます。引っ込んだ茅を出し、飛び出た茅は、小刀などで切り落とします。



叩き板

次に、茅を束ねている紐を切り、茅を持ち上げてほぐします。ただし、隅茅だけは束を解きません。

ほぐした際に、ゴミがたくさん出ますので、それらはほうきで下に落とします。



段を揃える



茅をほぐす

これで、屋根は完成です。



完成した屋根

壁を葺く

屋根が仕上がりましたら、次は壁を葺きます。今回は、屋根を先に葺きましたが、壁を先に葺いても、壁と屋根を同時に葺いてもかまいません。かつては、人手があれば、取りかかるところから仕上げ、一日で屋根と壁を葺き終えることができたそうです。

壁は、東面の向かって右端から葺いていきます。

最初に、下のほうの茅を置いていきます。根元を下に向け、少しの隙間も出ないように、横に押しつけるように置きます。

仮押さえのサックマをつけて、茅束をほどき、ほぐします。

※茅は、小束にして使う方法と、束ねないまま使う方法とあります。

次に、上のほうの茅を置きます。茅は穂を下向きにします。

仮押さえは、茅束に紐を通し、その紐を下のサックマを巻いて表に出します。

この作業は、一束ごとにやっていきます。束はほどきません。



下の茅を仮押さえする



茅束に紐を通す





下のサッカを巻く



縛る

外の茅を仮押さえしますと、次に、内側の茅を置きます。内側の茅は、間柱と間柱の間に入れていきます。

まず、茅が倒れないよう止めておくためのサッカをつけます。次に、そのなかに茅を入れていきますが、外側と同様に、最初に下の茅を置き、次いで上の茅を置きます。

※内側の間柱と間柱に茅を入れましたが、これは、ポンチセでの試みで、一般的ではありません。

次に、外側の茅にサッカをつけ、内外のサッカをしな紐で縛って、強く締めます。

縛り手は内側にきます。縛り目を外に出さないためです。

※内外の茅を一度にサッカで挟むのは、実際には非常に大変ですので、1～2段は外壁だけで締めたほうが楽です。



内側に茅を置く



縛り手は内側にくる



内側

この作業を繰り返し、4面を葺いていきます。
ただし、入口や窓がくる部分はあけておきます。

外の隅は、屋根の場合と同様に、火で焼いて、
「く」の字型に曲げたサッカを使います。
モセムも同じように葺いていきます。



隅のサッカ



モセムの壁を葺く

入口や窓をつくる場所は空けておきます。



入口や窓の部分は空けておく

入口 (アパ)・窓 (プヤラ)

壁葺きと並行して、入口をつくります。入口は、西壁の中央につくります。間柱と間柱の間を入口にしますので、両側の間柱が縦の枠になります。

入口の上の部分は、内側と外側にサクマをつけ、そのなかに茅を入れて、壁と同様に、内外のサクマをしな縄で縛って、締めます。

なお、茅は、根元のほうを適当な長さに切り揃え、間柱に強く押しつけるようにして入れます。束は解きません。



母屋の入口

次に、窓です。窓は、東壁に1箇所（神窓＝ロルンプヤラ）、南壁に2箇所（西寄りに小窓＝ポンプヤラ、東寄りに採光窓＝イトムンプヤラ）の計3箇所つくります。

※地方により、南壁の窓が1箇所のところがあります。

神窓と小窓の作り方は同じですが、採光窓は異なります。

神窓と小窓は、壁の茅を押さえているサクマの3段目と4段目の間に開口部をつくり、その下の部分の茅は、壁と同様に葺きます。上の部分は、先の入口の上の部分と同様につくります。

開口部の茅は切り揃えます。



小窓をつくる



茅を切り揃える



小窓

次に、採光窓です。採光窓は、下の部分が取り外せるようにします。

取り外しの部分は、壁をつくるときと同様に、茅を挟んでサクマとサクマをしな紐で縛り、締めます。厚さは、壁の厚さ一間柱の直径と同じにします。内側にはすだれを張ります。隙間なく、間柱と間柱の間にきっちりと納るようにします。

なお、外側のサクマは長くして、内側に倒れないよう、ストッパーの役目をさせます。



採光窓をつくる

※白老地方では、海漁の獲物を屋内に入れるときや、出産や葬式のときなどは、ここが臨時の出入口となりました。

これで、屋根葺きや壁葺き、入口や窓づくりなど、外まわりの作業が終わります。



内 装

次に、屋内を整えていきます。

1. 炉棚 (トゥナ)

炉棚 (トゥナ) をつくります。

炉棚は、梁から吊るした棚で、肉や魚、山菜を乾燥保存するために使います。

炉鉤 (スワッ) は鍋を吊るす棒で、鍋を前後上下に移動することが出来るようになっています。



炉棚の材料

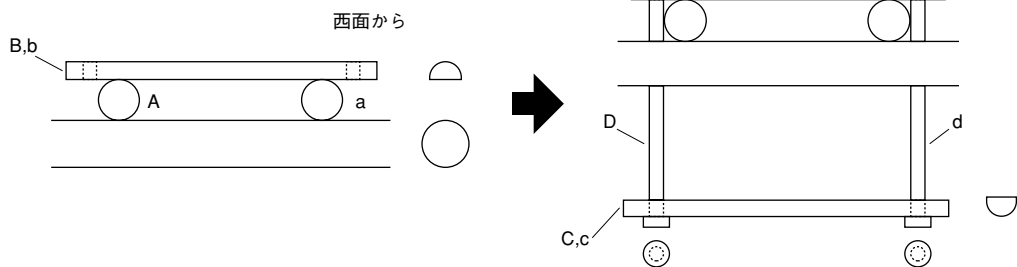
まず、炉を切るところの上に、梁と梁に渡して平行して2本の木 (A、a) を置きます。

そのA・aの上に半割りの木を2本 (B、b)、平行して置きます。なお、このB・bの両端のほうには穴を開けておきます。



炉棚をつくる

炉棚の製作工程

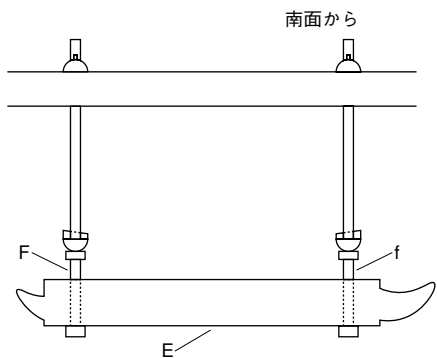
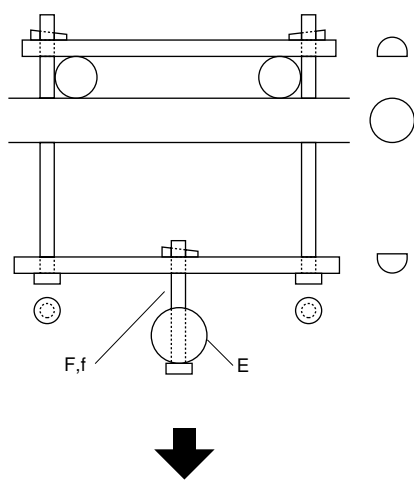


次に、半割りの木（C、c）に、一方に穴を開け、もう一方は端を大きくした木（D、d）を差し込み、D・dの穴の開いたほうの先をB・bの穴に差し込み、突き出したところで開いている穴に木櫛を入れ、固定させます。

なお、C・cの各中央にも穴を開けておきます。

次に、炉鉤（スワッ）をかけ、両端を加工した太めの木（E）に、一方に穴を開け、もう一方は端を大きくした木（F、f）を差し込み、F・fの穴の開いたほうの先をC・cの穴に差し込み、突き出したところで開いている穴に木櫛を入れ、固定させます。

これで炉棚は出来上がりです。



炉棚をつくる



2. 炉 (アペオイ)・炉縁 (イヌンペ)

炉棚が出来上がると、炉を切ります。

炉の位置は、家の中心か、もしくはその少し下手に切ります。

まず、地面を東西に長く長方形に掘り下げます。深さは25cm程度です。



地面を掘り下げる

掘り下げたところに、砂を敷きます。

※本来は、砂ではなく火山灰を使いますが、ポンチセの敷地はそもそもが火山灰ですので、波打ち際のきれいな砂を使いました。



砂を敷く

次に、炉縁 (イヌンペ) を置きます。三方 (東、南、北側) に木を置き、「コ」の字型にします。3本とも、上面は平に削っておきます。

※ポンチセでは、南北の木の端 (東の木と接するところ) の上半分を東の木の太さに削り、同じく、東の木も南北の木に接する両端の下半分を南北の木の太さに削って、3本を組み合わせて置きました。



炉縁を置く

炉縁を置いたところで、砂の上に枯葉を敷いて、砂をかぶせます。



枯葉を敷く

砂をかぶせるのと同時に、炉の上手内側両端に、イヌンペサウシペと呼ばれる丸太を埋め込みます。これは、男性が彫刻をするときなどの作業台になります。



イヌンペサウシペを埋め込む

最後に、砂をならします。



砂をならす

出来上がった炉に、火箸（アペパスイ）、灰かき（アペキライ）、明り台（ラッチャコ）を置きます。



火箸、灰かき、明り台

3. 内 壁

次に、内壁4面に鬼茅製の「すだれ」を張りま
す。



すだれを張る

止め具は、両端をとがらせた根曲がり竹を「U」
の字に折り曲げたものを使います。



止め具



すだれを止める

また、炉棚にもすだれを置きます。これは、炉
の火から出た火の粉などが天井に届くのを防ぐ役
目をします。



炉棚にすだれを置く

4. ござ (チタラペ、キナ)

すだれの上にさらにござを張ります。ござは2種類あり、上座側は模様入りの花ござ (チタラペ)、下座側は無地のござ (キナ) を使います。



ござを張る

止め具は、みずきでつくった櫛を使います。



止め具



ござを止める

5. 床 (ソ)

床 (ソ) をつくります。

床一面に、茅や枯草を敷き詰めて踏みならし、その上にすだれを敷きます。



すだれを敷く



茅や枯草を敷く

6. 窓すだれ

壁の素材と合わせて、窓の内側には花ござ、外側にはすだれを垂らします。



窓の外側にすだれを垂らす



窓の内側に花ござを垂らす

これで、チセづくりは終わりです。立派なチセが出来上がりました。



完成したチセ

III

附属建物

チセには附属して、仔熊飼養檻（ヘペレセツ）、食糧庫（プ）、便所（アシシル・メノコル）、物干し（クマ）といった建物が建てられます。ここでは、簡単に紹介します。

1. 仔熊飼養檻（ヘペレセツ）

仔熊を飼養するための檻をつくります。仔熊は神様からの預かりもので、養育を託されたと考え、大切に育てられました。

まず、先がY字型をした4本の柱を立て、その上に桁を置きます。次に、その上に梁を置くように木を置きます。交差するところは柱の上です。

同じようにして、校倉に木を組み合わせていきます。



柱を立てる

木が交差するところには「受け」をつくります。



「受け」をつくる

木の枠が出来上がりましたら、交差して外側に出た木を縦に置いた2木の木で挟み、上下をぶどうづるで結束します。

次に、一番下の木の上に隙間なく木を並べて、床をつくります。また、一番上の木の上にも並べて、天井をつくります。

これで仔熊飼養檻は完成です。



完成した仔熊飼養檻

2. 食糧庫（ブ）

食糧庫は、長い冬の生活のために、食糧を保存しておく建物です。ねずみや湿気から食糧を守るために、高床式になっています。

チセの屋根組みと同様に、地上にて屋根組みと小屋組みをして、桁・梁を置いた柱（足）に乗せます。



小屋組み



小屋組みを乗せる

桁と柱の間には、「ねずみがえし」として、半割りにした木を挟みます。

取り外しの出来るはしごをつけます。



「ねずみがえし」をつける

これで食糧庫は完成です。



完成した食糧庫

3. 便所（アシシル・メノコル）・物干し（クマ）

便所の多くは、チセの北西隅から少し離れたところにつくられます。1個だけつくり、男女兼用という地域が多いようですが、白老地方では、男女別に2種類の便所をつくり、名称も男性用をアシシル、女性用をメノコルと呼んで、区別していました。



便所をつくる

女性用は、三脚を置き、入口となる箇所を空けて、サッカをつけ、茅を葺いていきます。穴を掘って樽を埋めて便漕をつくり、入口は、茅すだれが下がるようにします。

男性用は、構造が簡単で、柱を4本立てて、「コ」の字型にサッカをつけ、茅を葺いていきます。便漕として穴を掘ります。

これで便所は完成です。



女性用便所の骨組み



完成した便所

次に、物干し（クマ）をつくります。

物干しは、チセの南側や西側につくられ、魚を干したりするのに使われました。

先がY字型になった木を2本立て、木を1本渡します。これで完成です。



物干し

こうして、チセ、附属建物すべてが出来上がりました。



完成したチセ、附属建物



※チセには、東側一神窓の前に幣柵（ヌササン）というものが設けられています。木幣（イノウ）が立てられ、神に祈ったり、祖先を供養したりするところで、大小3つの幣柵があります。新しくチセを建てたときなど、この幣柵は新築祝の儀礼の実施に伴って立てられます。

IV

チセ建築に伴う儀礼

チセを一軒建てるに当たって、いろいろな儀礼が行われます。ここでは、簡単に紹介します。

イ. 地鎮祭

チセを建てるとなると、まず行われるのが地鎮祭（チセコテノミ）です。地鎮祭は、チセを建てようとするその土地が、神々の意にかなうかどうかを占う儀式です。

チセや祭壇（幣棚）のおよその位置を決めたあと、炉に当たる場所に三脚を立て、炉鉤を吊るします。そうして神々に祈り、選んだ土地の使用許可を願います。結果は、後日「夢見」で現われ、「よし」ということになりますと、整地をして、建築に取りかかります。

ロ. 新築祝（+祖先供養）

チセが完成しますと、近隣の人たちを招待して新築祝（チセノミ）が行われます。

新築祝は、新居のお披露目ですが、第一には、新生活を守護してくれる神々を新居に迎える儀式です。火の神をはじめとして、主要な神々をお迎えし、守護を願います。

新築祝の終わりころ、祖先供養（シンヌラッパ）が行われます。祖先供養では、祖先に新しいチセが出来たことの報告と、日々の守護に対する御礼を述べ、御馳走を共にします。

新築祝も無事に終わると、新しいチセでの生活が始まります。



地鎮祭



新築祝



祖先供養

おわりに

かつて、北海道に渡った開拓農民たちが、入植して最初にしたことは、「チセ」を建てることでした。その地方のアイヌの家を真似たのでしょうか。屋根や壁を茅や笹、木の皮などで葺き、床は草を敷いたといえます。

チセですと、大工さんや屋根葺き職人がいなくても、また、製材した材木がなくても、身近な材料と道具を使って、誰でも建てることができました。チセとは、本来、そういう建物でした。

かつては余りあるほどあった材木や茅も、いまでは簡単に手に入れることができなくなりました。逆に、かつて、アイヌが簡単に手に入れることの出来なかった釘やノコギリなどが、いまでは簡単に手に入ります。

このマニュアル事業では、昔のチセを、昔どおりにつくってみました。はじめにもいいましたように、工法、構造、名称などは白老地方に伝わるものです。しかし、チセは多くの特色ある地域性を持ち、また、いまの時代に建てようとするすと、さらに多様性を持たせることができます。

どのようなチセを、どのような方法で建てるのか、そしてどのような活用の道があるのか、このマニュアル事業でのチセづくりが、そのひとつのヒントになれば幸いです。



部材一覧

| | 部材名 | サイズ(径×長) | 数量 | 材料名 | 備考 |
|-------|-------------------|----------|----------|------|---------------|
| 小屋1 | 桁 (ソベシニ) | 15×560 | 2 | はんのき | 計測値/実数 |
| 2 | 外梁 (ソエカリニ) | 13×370 | 2 | はんのき | 〃 |
| 3 | 中間梁 (ウナムキ) | 13.5×372 | 2 | はんのき | 〃 |
| 4 | 三脚 (ケトツンニ) | 7×268 | 6 (3×2) | はんのき | 〃 |
| 5 | 棟木 (キタイオマニ) | 7.5×280 | 1 | はんのき | 〃 |
| 6 | 隅垂木 (シッケウリカニ) | 6×314 | 4 | はんのき | 〃 |
| 7 | 母屋桁 (サキリオマツ) | 7.5×371 | 2 | はんのき | 〃 |
| 8 | 二重梁 (サキリオマツ) | 6.5×175 | 4 | はんのき | 〃 |
| 9 | 垂木 (平屋根=チセソカリカニ) | 6×300 | 18 (9×2) | はんのき | 推定値/実数 |
| 10 | 垂木 (妻屋根=エトツポクリカニ) | 6×220 | 12 (6×2) | はんのき | 推定値/実数 |
| 11 | 棟木 (キタイラリニ) | 7.5×369 | 1 | はんのき | 計測値/実数 |
| 12 | 煙出し窓 (ボンリカニ) | 3×94 | 4 (2×2) | はんのき | 〃 |
| 13 | 煙出し窓 (エトツポクンニ) | 4.5×103 | 2 | はんのき | 〃 |
| 14 | 屋根下地材 (アウンサツマ) | 3.5×270 | 24 | あおだも | 推定値/実数 |
| 15 | 屋根茅押さえ材 (ソユンサツマ) | 3.5×270 | 34 | あおだも | 推定値/推定数 |
| 16 | 棟茅押さえの横木 | 6×270 | 2 | はんのき | 推定値/実数 ※防腐材塗布 |
| 軸1 | 柱 (イクシベ) | 17×270 | 20 | みずなら | 推定値/実数 ※股木 |
| 2 | 壁下地材 (アウンサツマ) | 3×270 | 41 | あおだも | 推定値/実数 |
| 3 | 外壁茅押さえ材 (ソユンサツマ) | 3×270 | 29 | あおだも | 推定値/推定数 |
| 4 | 内壁茅押さえ材 | 3×270 | 38 | あおだも | 〃 |
| セム小屋1 | 梁 | 11×220 | 1 | はんのき | 推定値/実数 |
| 2 | 垂木 | 6×270 | 6 | はんのき | 〃 |
| 3 | 屋根下地材 (アウンサツマ) | 3×220 | 5 | あおだも | 〃 |
| 4 | 屋根茅押さえ材 (ソユンサツマ) | 3×220 | 5 | あおだも | 〃 |
| セム軸1 | 柱 (イクシベ) | 15×250 | 5 | みずなら | 〃 |
| 2 | 壁下地材 (アウンサツマ) | 3×200 | 9 | あおだも | 〃 |
| 3 | 壁茅押さえ材 (ソユンサツマ) | 3×240 | 8 | あおだも | 推定値/推定数 |
| その他 | 足場丸太 (茅支え材) | 12×400 | 21 | 材問わず | 〃/方法により数に違い有 |

| | | | | |
|-----------|--------------------|------|-----|---|
| ※木材 集計 | 径12~15cm (桁梁用) | はんのき | 7 | 凡例 ※炉・炉棚・付属施設は別 ※サイズは最大値。単位 (cm) ※端材で流用可能な材は集計に含めず |
| | 径6~8cm (垂木・三脚・棟木用) | はんのき | 55 | |
| | 径3~5cm (サツマ用) | あおだも | 193 | |
| | 径15~17cm股木 (柱用) | みずなら | 25 | |
| | 径10~12cm (足場=茅支え材) | 材不問 | 21 | |
| | 計 | | 309 | |

| | | | | | |
|-----|----------------|------|-------|----|------------------|
| 被覆1 | 屋根茅 (主屋・下屋1段目) | 15× | 133 | よし | 計測値/実数 |
| 2 | 屋根茅 (2~5段目) | 12× | 627 | よし | 〃 |
| 3 | 隅茅 | 17× | 20 | よし | 〃 |
| 4 | 目隠し茅 | 7×80 | 34 | よし | 〃 |
| 5 | 棟茅 | 12× | 70 | よし | 東径は不問/推定数 |
| 6 | 枕茅 | 25× | 2 | よし | 推定値/実数 |
| 7 | 外壁茅 (上段) | 7× | 330 | よし | 計測値/推定数 |
| 8 | 外壁茅 (下段) | 不問 | 上段と同量 | よし | |
| 9 | 内壁茅 (上段) | 12× | 130 | よし | 計測値/推定数 (セムは内壁無) |
| 10 | 内壁茅 (下段) | 不問 | 上段と同量 | よし | |
| 結束1 | やまぶどうづる | | | | 桁梁等 |
| 2 | しな紐 (親指大) | 1.7× | | | 梁桁の結束用 |
| 3 | しな紐 (小指大) | 1.4× | | | 垂木・三脚・下地材用 |
| 4 | しな紐 (細) | 0.4× | | | 茅絞め用 |
| 5 | 麻紐 | 0.3× | | | 茅束ね用 |
| 6 | 藁縄 | 1.7× | | | 足場丸太吊り用 |

内装材、道具一覧

■内装材

| 種別 | 用途 | サイズ (長×幅) | 種別 | 用途 | サイズ (長×幅) | 種別 | 用途 | サイズ (長×幅) |
|-----|----------------------------|-----------|------|-----------------|-----------|-----|-----------------------------|-----------|
| すだれ | 屋根1 | 230×345 | 無地ござ | 壁1 | 380×100 | 花ござ | 壁1 | 380×100 |
| | 2 | 230×345 | | 2 | 380×100 | | 2 | 380×100 |
| | 3 | 230×270 | | 3 | 380×100 | | 3 | 300×100 |
| | 4 | 230×270 | | 4 | 250×100 | | 4 | 230×100 |
| | 壁1 | 185×810 | | 5 | 200×100 | | 5 | 230×100 |
| | 2 | 180×250 | | 6 | 130×100 | | 6 | 150×75 |
| | 3 | 180×250 | | 7 | 80×110 | | 7 | 90×110 |
| | 4 | 180×200 | | 8 | 60×100 | | 8 | 90×22 |
| | 5 | 110×120 | | 9 | 60×100 | | 窓1 | 170×90 |
| | 6 | 110×120 | | 床1 | 380×100 | | 2 | 170×90 |
| | 7 | 110×100 | | 2 | 380×100 | | 3 | 150×75 |
| | 床1 | 120×540 | | 3 | 380×100 | | | |
| | 2 | 120×540 | | 4 | 380×100 | | | |
| | 3 | 120×320 | | 5 | 200×80 | | | |
| | 戸1 | 110×230 | | 6 | 200×80 | | | |
| | 2 | 180×150 | | 7 | 200×80 | | | |
| | 窓1 | 110×80 | | 8 | 200×80 | | | |
| | 2 | 110×80 | | 9 | 80×30 | | | |
| | 3 | 80×80 | | 10 | 80×15 | | | |
| | 炉棚1 | 130×150 | | 11 | 80×15 | | | |
| | 2 | 130×150 | | | | | | |
| 計 | 21枚 | | 計 | 20枚 | | 計 | 11枚 | |
| 材 | ・鬼茅 ・やまぶどうづつの皮／がま縁 (編糸) | | 材 | ・がま ・畳糸 (編糸) | | 材 | ・がま ・色布 (木綿) ・畳糸 (編糸) | |

■道具

| 道具 | 道具名 | 用途 | 工程 | 備考 |
|----|-----------|---------------------|------|---------------|
| 1 | ナタ | 木材を切る, 仕口を彫る, 紐を切る | 全般 | |
| 2 | マサカリ | 木材を切る | 全般 | |
| 3 | ノコ | 木材を切る | 全般 | 極力使用しないよう努めた |
| 4 | 小刀 | 紐を切る | 全般 | |
| 5 | カマ | 茅を刈る, 木材の皮を剥く, 紐を切る | 準備 | |
| 6 | 茅束ね器 | 17, 15, 12, 7cm径用 | 準備 | 白老で近年考案された道具 |
| 7 | 鉄棒 | 熱して木材に穴を開ける | 小屋組 | |
| 8 | ホッキガイの貝殻 | 穴掘り用 | 軸組 | |
| 9 | かけや | 間柱を横から叩き入れる | 軸組 | |
| 10 | 臼 | 屋根を一時的に支える | チセブニ | |
| 11 | 三脚 | 〃 | チセブニ | |
| 12 | 針 | 茅葺き用 | 茅葺き | 木製以外に, 金属製も使用 |
| 13 | 茅叩き (サッテ) | 茅の段を揃える | 茅葺き | |
| 14 | ほうき | 茅屑を落とす | 茅葺き | |
| 15 | 庭鋏 | 茅を切り揃える | 茅葺き | |
| 16 | 押し切り | 茅束を切り揃える | 茅葺き | |

■主屋床面積……5.70×3.76=21.43平米

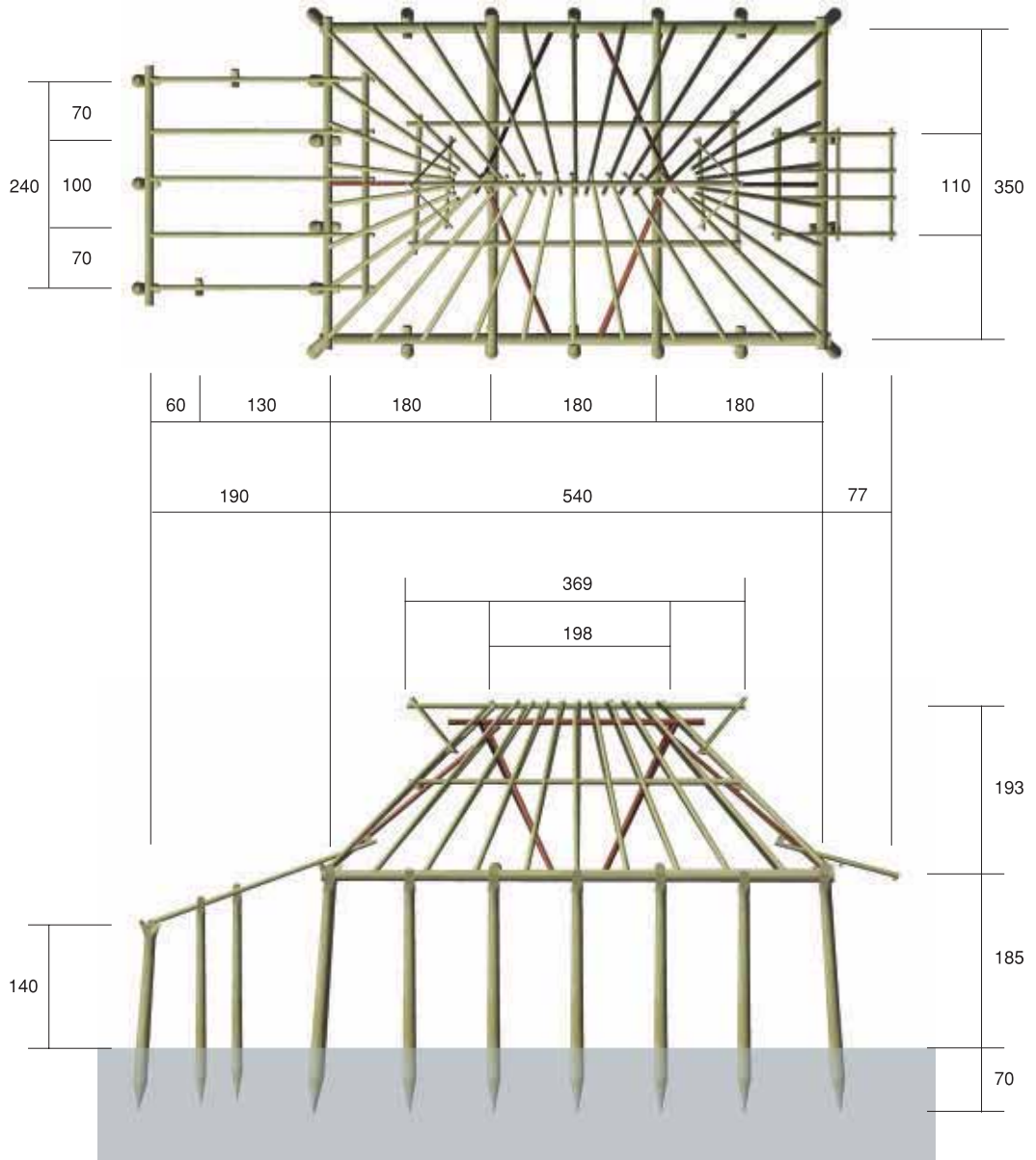
■モセム床面積……2.00×230=4.6平米

■総床面積……26.03平米

■主屋屋根面積……9.25平米×2+4.075×2=26.65平米

■主屋葺き面積……12.035平米×2+5.863×2=35.796平米

平面图·立面图



参 考 文 献

チセは、江戸時代よりさまざまな文献に登場してきます。ここでは、比較的入手しやすい文献をいくつか紹介します。なお、現在、絶版となっていたり、入手が困難なものでも、大きな図書館等で閲覧できるものについては、行末に「*」印をつけておきます。

- アイヌ民族博物館監
1993：『アイヌ文化の基礎知識』草風館
- アイヌ民族博物館編
1998：『アイヌのすまいチセを考える』アイヌ民族博物館
2000：『ポロチセの建築儀礼』伝承事業報告書 アイヌ民族博物館
- 内田祐一
1989：「帯広・伏古におけるチセと附属施設について」『アイヌ民族博物館研究報告』2 アイヌ民族博物館 *
- 萱野 茂
1978：『アイヌの民具』すずさわ書店
- 萱野 茂、須藤 功
1976：『アイヌ民家の復元 チセ・ア・カラーわれら家をつくるー』未来社
- 久保寺逸彦
1968：「アイヌの建築儀礼についてー沙流アイヌよりの聴書きー」『北方文化研究』3 北海道大学 *
- 関 秀志他
1997：『北海道の自然と暮らし』北の生活文庫2 北海道（北海道新聞社版として市販）
- 高倉新一郎
1943：「アイヌ家屋の調査」『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会 *
- 鷹部屋福平
1939：「アイヌ屋根の研究と其構造原基體に就て」『北方文化研究報告』1 北海道帝國大學 *
――：「アイヌ住居の研究」『北方文化研究報告』2 北海道帝國大學 *
1940：「アイヌ住居の研究ーアイヌ家屋の地方的特性（アイヌ建築語彙）」『北方文化研究報告』3 北海道帝國大學 *
1941：「アイヌ住居の研究ー日高平取方面に於ける地方性」『北方文化研究報告』5 北海道帝國大學 *
1942：「アイヌ建築の特徴とその変遷(1)」『北海道建築』4 北海道建築協会 *
――：「アイヌ建築の特徴とその変遷(2)」『北海道建築』5 北海道建築協会 *
1943：『アイヌの住居』東亜建築撰書2 彰國社 *
――：『北方圏の家』東亜建築撰書7 彰國社 *
――：「アイヌ建築の特徴とその変遷(3)」『北海道建築』6 北海道建築協会 *
――：「アイヌ建築の特徴とその変遷(完)」『北海道建築』7 北海道建築協会 *
- 鷹部屋福平、高倉新一郎
1969：「住居」『アイヌ民族誌』上 第一法規出版株式会社 *
- 知里真志保
1950：「アイヌ住居に関する若干の考察」『民族學研究』144 日本民族学協会（1973：『知里真志保著作集』3 平凡社 所収）

- 秦 穂丸撰、間宮倫宗増補
1823：『蝦夷生計圖説』（1969：『日本庶民生活史料集成』4 三一書房 所収 *、
1990：『蝦夷生計圖説』北海道出版企画センター 復刻）
- 北海道教育庁社会教育部文化課編
1989：『アイヌのくらしと言葉1』アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ2 北海道教育委員会 *
- 北海道教育庁社会教育部文化課、北海道教育庁生涯学習部文化課編
1982～1999：『アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査』Ⅰ～Ⅷ 北海道教育委員会 *
- 山本祐弘
1943：『樺太アイヌの住居』建築新書10 相模書房 *
- 1960：『樺太アイヌ・住居と民具』相模書房 *

復元したチセが見られる施設

チセを復元して展示・公開している施設（*は有料）を紹介します。なお、マニュアル事業で建てたポンチセは、アイヌ民族博物館に展示しています。

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ・アイヌ植物園 ・アイヌ民族博物館 ・旭川市博物館 ・嵐山公園 ・萱野茂・二風谷アイヌ資料館 ・川村カ子トアイヌ記念館 ・国立民族学博物館 ・のぼりべつクマ牧場 ・平取町立二風谷アイヌ文化博物館 ・北海道開拓記念館（部分） ・野外民族博物館リトルワールド | <ul style="list-style-type: none"> 北海道上士幌町上音更東三線262 北海道白老町若草町2-3-4 * 北海道旭川市神楽3条7丁目 北海道鷹栖町字近文9線西4号 北海道平取町二風谷 * 北海道旭川市北門町11丁目 * 大阪府吹田市千里万博公園10-1 * 北海道登別市登別温泉町224 * 北海道平取町二風谷 * 北海道札幌市厚別区厚別町小野幌53-2 * 愛知県犬山市今井成沢90-48 * |
|---|--|

アイヌ生活文化再現マニュアル
建てるー祖先の時代のチセづくりー

2000年3月 発行

発行 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構

〒060-0001

北海道札幌市中央区北1条西7丁目

プレスト1・7 (7階)

TEL (011) 271-4171 / FAX (011) 271-4181

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製（コピー）することは、法律で禁止されていますので、あらかじめ財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構あてに許諾をお求めください。

